

〈書評論文・書評〉[書評]

時本真吾 (著) 『あいまいな会話はなぜ成立するのか』
(岩波科学ライブラリー)

東京：岩波書店，2020，iii + 122p., ISBN 978-4-00-029695-3

三浦優生
愛媛大学

1. はじめに

『あいまいな会話はなぜ成立するのか』は、さまざまな発話表現のうち、話し手が遠回しに自分の意図を伝えようとする「間接的表現」に焦点を当て、聞き手が発話から話し手の含意を理解する仕組みについて、理論的・実証的なアプローチを紹介しながら説明する。

本書は、以下の6章から構成されている。第1章では、間接的表現にまつわる3つの謎をとりあげ、第2～5章では、過去に提唱された代表的な理論を概説し、それらの謎に迫っている。第6章では、脳科学分野における最新の研究を紹介し、発話解釈のプロセスがどのように検証されるのか、また得られた知見から、3つの不思議にどのように答えられるか、その可能性を議論している。

第1章 言わないことが伝わる不思議

第2章 会話は助け合いである

第3章 人間は無駄が嫌い

第4章 体面が大事

第5章 うやむやにした方が得

第6章 謎はどこまで解かれたか

間接的表現の解釈過程を議論するとき、主たる領域が語用論であることは、言語学者にとっては明らかであるが、本書では、「語用論」というキーワードは登場しない。一方、哲学や人工知能、神経科学といった諸領域との結びつきが意識されており、この研究課題が広く学際的な性質をもつことが読者にも伝わる内容構成になっている。よって本書は、言語学を専門とし学ぼうとする学生の入門書にもなり得るが、より広く一般的な、コミュニケーションに興味を持つ読者を想定しまとめられたものと位置づけ、その前提を踏ま

え、内容を読み進めるものとした。

2. 間接的表現の解釈にまつわる3つの不思議（第1章）

あいまいな発話表現が聞き手に伝わる1つめの謎として、著者は「文脈の検索の不思議」を挙げている。これは、発話解釈に必要な文脈は、物理的情報や一般常識、聞き手や話し手の経験など、その候補が無限であるにもかかわらず、聞き手が短時間で必要な文脈を特定し、意図にたどりつけるのはなぜか、という問題である。2つめの疑問として、「推論の収束の問題」が掲げられている。間接的表現が用いられるとき、言語化されていない含意には誤解が生じるリスクをはらむ。それにもかかわらず、多くの場合、聞き手は誤解や深読みをすることなく、ほどほどの地点で解釈を止められるのはなぜかが問われている。そして、最後に挙げられた不思議は、そもそもなぜ人は、遠回しな表現を用いるのかという、「間接的表現の存在理由」に関するものである。章の後半では、「心の理論」の概念に触れ、発話解釈と他者理解との関連や、脳研究から得られた知見による糸口を窺わせつつも最終章に預け、続く章では理論的枠組みから発話解釈の謎を説明していく流れとなっている。

3. 3つの不思議に迫る言語理論（第2～5章）

以上の謎に迫るために、各章ではそれぞれ、協調の原理、関連性理論、ポライトネス理論、戦略的話者の理論を紹介している。

第2章のグライスのモデルでは、実際の発話例を交えながら、協調の原理と4つの下位原則（格率）の説明がなされている。本書が取り扱う間接的表現は往々にして、4つの下位原則のいずれかに違反している。例えば、極性質問に対し、はい・いいえで直接答えずに遠回しな返答をおこなう場合、話し手は関係性の下位原則に違反していることになる。しかし、一見したところ、会話の参加者は協調的にふるまうべきとする会話の大原則に、話し手が従っていないとも思えないという背景から、聞き手は話し手の真意を探ろうと推論を進めていく。著者はこの過程を、結果から因果関係を探り仮説を立てようとする心の動き（アブダクション）から説明しており、グライスの協調の原理は、間接的表現が発話された状況下での文脈検索のきっかけとして機能すると論じている。一方で、いかに聞き手が推論を収束させるか、なぜ間接的表現を用いるかという2つの不思議については、グライスの理論では答えを導くことができないと指摘している。

第3章では、スペルベルとウィルソン（Sperber and Wilson 1986/1995）による関連性理論の立場から、間接的表現の理解について説明がなされている。かれらの理論では、進化的な視点から、人間が環境に適応的であった特徴のひとつとして、ヒトの認知はより効

率的にはたらくようにできているという想定を置いている。そして、聞き手は発話解釈の際に、認知効果と処理コストとのバランスを踏まえながら効率的に推論を進めるというものである。その過程は自動的・無意識的なもので、聞き手は接近可能な順に解釈を進めるが、著者はこの文脈の検索を、関連のある概念が次々に連想されていく活性化拡散という記憶のはたらきにより説明している。また、推論の収束については、予測された関連性を満たした時点で解釈を止めると述べられているが、その予測を為す仕組みについては明確な答えが得られていないと指摘している。最後に、間接的表現の存在理由について、関連性理論では、余分な処理コストが生じる引き換えに、例えば問いに対する答えだけでなく、理由や敬意なども伝達されるといった、追加の認知効果を得ることができると説明している。

第4章では、ブラウンとレビンソン (Brown and Levinson 1987) によるポライトネス理論の立場から、3つ目の謎である間接的表現の存在理由に関する答えを探っている。この理論では、間接的表現とは、会話における相手の顔 (フェイス) を傷つけまいとする対人配慮により生じるものであると説明した。顔とは、日本語でいう「体面」や「体裁」に相当するとしている。また、その行為がどの程度相手の顔を脅かすかという危険度は、相手との社会的距離、力関係、その行為がもたらす負荷度という3つの要素を足し合わせた公式によって見積もられるとし、危険度に応じて話し手が選択するストラテジーとして、丁寧さの度合いを調整する仕組みが説明されている。一方で、著者は、この説明に当てはまらないとする例を取り上げている。それは、相手の顔をつぶすまいとする配慮が発生しない状況でも、間接的表現は行われるというものである (例: 誘拐犯が親に「子どもの安全は保証しない」と遠回しに脅迫する)。グライスの理論でも前提とされている、協調的コミュニケーションにあてはまらない状況においては、ポライトネス理論では間接的表現の存在意義を十分に説明できないと著者は指摘し、次章でさらにこの問題について、別の理論から迫っていく。

第5章では、ピンカー (Pinker 2007) による戦略的話し手の理論を紹介し、ポライトネス理論とは異なる立場から、間接的表現の存在理由について考察している。ゲーム理論の考えを取り入れた斬新なアプローチとして紹介されたこの理論においては、話し手は、他者との関係を考慮しながら、自分の利得が最大になるように、行動や意思決定を行うと説明されている。そして、間接的表現の使用もまた、その状況での利益を見越して行われるものとしている。ポライトネス理論では説明できなかった非協調的なやりとりの例として、スピード違反を犯した運転手が、警察官に賄賂を渡すか・渡さないかという選択を行う場面が挙げられている。相手の警官が誠実か不誠実かが分からない状況では、賄賂を渡すことには違反切符よりも深刻な逮捕の危険がとれない、渡さないことは確実に違反切符を切られることを意味している。一方、間接的な賄賂のほめかしを行った場合は、相手が不誠実な警官であれば違反を見逃してもらえる可能性が残り、誠実な警官であった場合

も、賄賂の提案が明確な相互知識として共有されず証拠も残らないため、誤認逮捕のリスクを恐れる警官によって、違反切符のみで済ませられる可能性が残る。このように、相手との関係性が明確でない場合には、間接的な行動を選択したほうが、より自分の利得が高まるというのが理由として述べられている。一方、この理論では、残る2つの問題、文脈の検索の問題と、推論の収束の問題には答えていないと指摘している。

以上のように、間接的表現を用いたり理解したりすることの謎について、主要な理論からの説明がなされた。3つの不思議のうち、文脈の検索や推論の収束に関しては、聞き手側の立場から発話解釈のプロセスを解明しようとする関連性理論が、より丁寧な説明を行うことに成功しているように思われる。より引き出しやすい文脈から解釈を検討し、ある程度の地点で止めるという説明は、効率性の面から理にかなっている。ただし、活性化拡散の説明で、著者はプライミング効果の実験を紹介し、ターゲットと関連する単語が呈示された場合の課題の反応速度が速くなることを報告したが、気付かないほどの短い呈示時間でも効果が表れるという現象について、文脈検索との関連が明確に説明されていないようだ。このことは再びプライミング効果に言及した第6章でも説明されず、興味を持った読者には疑問を残したかもしれない。文脈の検索に関する謎については、関連性理論の他、グライスによる理論においても説明がなされている。会話において人は協調的であるとする原理は、間接的表現を聞いた聞き手に因果推論を生じさせ、文脈の検索を行わせる機能を果たすと述べられている。一方、戦略的話者の理論では、聞き手側からの解釈のプロセスが説明されておらず、この問いに答えることは難しいようである。

3つ目の謎である間接的表現の存在意義は、各理論で異なるアプローチをとって議論がなされている。関連性理論では、間接的表現は処理コストに見合う認知効果をもたらすとし、発話を聞いた時、聞き手はその発話に最適の関連性があることを当然視すると述べられている。この期待は、意図明示の伝達行為が行われる際に自動的に生じる認知的なはたらきであるが、これはグライスが挙げた、参加者が守るべき協調の原理とは本質的に異なるものであることを、改めて確認しておきたい。次に、ポライトネス理論と戦略的話者の理論においては、話し手側の視点に立っており、間接的表現が、顔を傷つける危険を避けるという対人配慮のためか、自分の利得のために用いられるのかという点で、対照的な前提で謎に迫っている。また、本書において著者は、ポライトネス理論では3つの要素を1次元的に足し合わせることで危険度を見積もることができるとしたが、戦略的話者の理論では3種類に分類される普遍的な人間関係によって顔をつぶす危険度が変わると説明し、この違いを重要なものと捉えている。しかしながら、ポライトネス理論で扱われた、「社会的距離」や「力関係」と呼ばれる要素と、ピンカーによる「人間関係」という概念が、どのように異なるのが明確に説明されておらず、初学者にはやや疑問が残るところであるかもしれない。以上のように、人間が協調的であること、効率的であること、戦略的であること、これらのうちどの本質が、間接的表現の成立をもっとうまく説明するのか、

明確な回答には至っていないが、著者も触れた通り、どの立場に立つかによりそのプロセスの見え方ががらりと変わることが興味深く感じられた。またこれらの謎は、次章の脳研究からの知見によりさらなる説明がなされている。

4. 脳科学は何を明らかにしたか (第 6 章)

最終章では、脳機能計測を用いた最新の研究から、間接的表現にまつわる謎に切り込む知見を紹介している。

fMRI を用いた実験では、間接的表現を呈示された条件では、直接的表現の条件よりも、心の理論と関連のある部位の活動が高いことが報告された。また間接的表現を処理する状況で、心の理論に関連する部位と相関が強いのは、個々の要素をつなげて統一する役割を果たす部位であることも報告している。また、脳波計測を行った実験では、先行発話次第で、間接表現の解釈にかかる手順の数が異なる 2 パタンの会話を用意したという。すると、間接的表現に至る質問文の述語が現在形の時は、先行発話の解釈にかかる手順による脳波の活動には差がないが、質問文が過去形の場合には、解釈に負荷のかかる条件でより大きな波形の変化がみられたと報告された。間接表現を与えられたときの文脈の検索において、接近可能な解釈を重ねていく手順の数よりも、時制がより大きい影響を与えるとするこの結果は、文脈検索の謎を更に深めたように思われた。

時制による脳活動の違いが認められたことについて、著者は視点取得の能力を取り上げ、説明を行っている。発話解釈と心の理論の機能には密接な関係があることは第 1 章でも述べられたが、心の理論とは他者の立場から物を見る能力であることから、視点の切り替えを行うことも心の理論に含まれる力であると考えられる。実際、心の理論に関連する脳の活動部位と、時間や場所にかかわる視点取得をつかさどる部位は重複することが明らかにされており、このことから著者は、過去時制での発話を呈示した場合では、聞き手の視点取得にかかる負荷を高め、条件間の差をもたらしたものと説明している。ただし、実験で呈示した現在形の文例「お祝いを贈る？」の発話は、行動そのものは現在でなく未来の出来事を示すものである。よって、なぜこの発話文では、視点取得にかかる負荷が過去形よりも低いという結果があらわれたのか、疑問が残る部分もあり、今後のさらなる研究成果が待たれるところである。いずれにせよ、含意の理解において、時制の違いが影響を及ぼすという発見は非常に新しく示唆をもたらす結果であることに間違いはない。

また、推論の収束については、連想の仕組みを神経細胞のはたらきから説明を行った。連想はある概念から別の概念への神経回路が安定状態にあることを意味するが、ほどほどの地点で、且つどの聞き手でもだいたい同じような解釈で推論が収束するのは、連想しやすい概念や意図に対応する神経回路の安定状態が、自他で共通しているからではないかと考察している。また一方で、その解釈を予測することはまだ不可能であると述べている。

最後に、間接的表現を行う理由については、戦略的談話者の理論で述べられた利得の考えをもとに、報酬系の脳活動を調べた研究を紹介している。ギャンブル課題を用いた研究では、自分ではなくゲームに参加する他者の報酬の予測を行う際に活動が認められた部位が、心の理論をつかさどる部位と一致することが明らかになったという。このように他者の利得に着目することは、結局は全体や自身の利得にもつながり、これはヒト以外の動物にも認められる適応的な能力であると考察している。さらに、地位や名誉などの、目に見えない社会的報酬への欲求はヒト固有であると考えられるが、これを得るために他者は欠くことのできない存在であるはずだ。間接的表現により獲得する利得が社会的報酬であるならば、他者理解をつかさどる部位と関連が深いことにも納得がいくと説明している。具体的にどのような社会的報酬が間接的表現から得られるのかについては、その他の理論と比較すると詳細に乏しく、より具体的な説明が期待される。

5. おわりに

以上のように、本書では、間接的表現が伝わる仕組みについて、理論的・実証的アプローチから3つの謎に迫り議論された。紹介された理論のうち、戦略的談話者の理論については、著者も述べる通り、他の理論のように語用論領域で中核的な立場を担ってきたものではないが、より学際的な視点を備え、脳科学や進化学をはじめとする諸領域の知見を反映しながら発展を重ねた考えのようである。戦略的という用語から、自他の関係はより競争的なものであるという印象を与えるが、必ずしもそうではなく、相手との関係を維持したり、協力し合って利を得たりといったような、時には協調的な様々な目的に沿って、相手との関係に適した戦略を選択しているのだと理解した。各理論によって扱う発話例が異なるため、やや比較が行いにくいと感じる点もあった。とはいえ、限られた紙面で、理解に必要な多くの概念を紹介しなければならないという制約のもとで、冒頭で述べた本書の位置づけに沿い、一般的読者の理解を深める役割を大いに果たしていると考える。

脳研究の一連の成果からは、他者理解の能力と間接的表現の解釈との関連が強く窺われることが確かめられた。サリー・アン課題のように、他者の行動予測を明らかに求められるような状況でなくても、私たちは発話を耳にすると、瞬時にそして無意識的に、他者視点への切り替えを行っていることを示す結果は大変興味深い。結びとして著者は、他者と同調する脳の仕組みが存在する可能性について、ミラーニューロンを例にとりながら説明している。関連する報告として、脳波計測を行った実験からは、自身ではなく、目の前の他者が、文脈との組み合わせが不自然な発話を呈示された状況において、関連する脳波(N400)が生じたことを報告している。自分よりも他者の解釈に沿った反応が得られたことは、驚くべき結果である。コミュニケーションにおいて他者に同調する脳の仕組みがさらに明らかになれば、あいまいな会話が成立する謎を理解するための、最も重要な鍵と

なるだろう。

参考文献 (本書巻末の参考文献で挙げられている文献以外)

Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.